

# 安栖世界冒險記

倉月夜光

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

主人公は性別秀吉！性格根暗トシアキ！

ヒロインは人工生命体！得意魔法はカナヘビ魔法！

良心はカナヘビゴリラ！（？）

そんな身内での安価の結果を設定厨の自分が料理する作品です

※安価をとることで更新が遅れる可能性があります、ご了承ください

# 目次

I 物語の始まり	1
II 物語の始まり	14
III 物語の始まり	27



# I 物語の始まり

——目が覚める。

最近秋も深まり、冬という活動しにくくなる季節が近づいてくる。

朝起きると寒い、という感覚が新鮮で新しい気持ちになる。

あのクサレ魔術師との塔での生活は便利ではあつたけれども、目に見えたり体で感じられるような変化というものが存在しなかった。

あいつの魔術によつて塔の全領域は管理され、生活するうえで快適な温度ですつと生きてきたから外で感じられる、“熱い”という感覚や“寒い”という感覚はとても新鮮だ。

あいつに追い出されるような形で出て来た私ではあつたが、その点だけでは感謝してもいいのかもしれない。

ベッドから起きるとそこは自分がこの街についてから活動拠点としている、この街で一番と名高い宿屋、《白馬の料亭》の個室の光景が目映る。

この街に来てから3か月ほど、クソ魔術師が手切れ金としてそこそこのお金を持たせてくれていたので料理のクオリティが高いこの宿の部屋の一角は絶対に手放せないものとなりかけている。

それに自分は女なのだから、他の男どもには狙われるような立場なのだ。その点、宿に関してはセキュリティの高さも求めることになる。下手な宿屋は忍び込まれることが珍しくないとインプリンディングされている自分は、ここではないボロい宿屋に泊まることは考えられない。

自分の服をいつもの冒険者として活動するための服装に着替えていく。

ハーフパンツとストッキング、それからチュニツクは耐魔法の使用が外道魔術師によつて刻まれた、言いたくはないが逸品であるし、この街に来てから購入することになった胴鎧は自分の魔法によつて属性軽減を付与した、自慢ではないがそれなりの品だ。間違つても他の駆け出しと呼ばれるような冒険者たちには絶対に見劣りしないものである。

部屋に立てかけてある備え付けの鏡を見れば、自分の虹色の髪に合わせて無彩色の黒の下半身と、空色のチュニツクの上に白い胴鎧を身に着けている、いつも通りの自分の姿を見ることが出来る。

着替えは寝起きの精神を活動するために切り替えるための一種の儀式のように考えているので、鏡でいつも通りの姿を見ないとシヤキつとした、朝の気持ちになれないのだ。

ドアの隣に立ってかけてある黒一色のメイスを手を持つ。

おおよそ長さ一メートルほどの、先が太いだけのなんの変哲もないかのように見える鈍器だ。

これが悔しいながら自分に一番合っている武器だから、手放すことは出来ない。作ったのが例えあのポケ魔術師であってもだ。

魔術師が魔術を使うときには、魔力を自分の身体の外部に放出する為の放出口として、魔術の杖のような媒介が必要になる。自分はそれこそ本や杖のように一般的によく使用されているような魔術媒介が欲しかったのだが、何をトチ狂ったのかあのバカ魔術師は、

「普通の媒介にしてもつまらないし、魔法使い（物理）でキャラを濃くしようか」  
などとほざき始め、結果今私の手にはこのメイスが存在する。

まあ、自分の手に完璧に馴染むし、魔術の触媒としても店売りの中にはどれだけ高価な者でもこれより高効率なものはないし、武器として非常に有用なのは認めざるを得ない。

認めざるを得ないので、非常に不本意ながら、しぶしぶこの武器を使用しているのだ。殴打武器として使うときはこのメイス自体に魔力を流して重量をあげるの、普段から持ち運ぶときにはそこまでの重量は感じない。

ハーフパンツの腰に回してあるベルトの一部に作った、メイス持ち運び用のスペースに今持ったメイスを引っ掛け、私は部屋の外へと、今日の冒険に出かけた。

☆

「あ、おはようございます！ 今日も早いですね！」

自分の部屋がある三階から一階に降りると、この街に来てから一番初めに“友達”と呼べる間柄になった、アカシアが私を出迎えてくれた。

彼女はこの宿屋の主である夫妻の一人娘であり、綺麗な黄色の髪をサイドアップでまとめているウェイトレス姿に身を包んでいる。このお店は一階の一角に宿泊者用の飲食スペースがあり、そこで食事の販売もおこなっているの、そこのお手伝いをしているとても可愛らしい14歳の少女だ。私も、彼女の笑顔には何度も癒された経験がある。



「おはよう、今日も元気ね」

「はい！ 私、これだけが取り柄ですからね」

今日も朝から笑顔でいいことだ。朝からあの魔術師の顔を思い出して沈んだこの気持ちを癒してくれる。

かわいいは正義なのだ、この娘が自分に実体験として教えてくれた。それまでは、世話の面倒な猫などのペットを飼う人間の気持ち理解出来なかったが、飼い主が毎日癒しの存在を求める気持ちを理解してしまった。

「今日も朝から依頼に出るんですね。ここまで頻繁に依頼に出る冒険者の人はいませんよ」

「そうかしら、貴方も毎朝ここで働いているでしょう？ それと一緒によ」

そう、特に自分は普通の人よりも疲労などが溜まりにくい体質なのだから、本来ならば一週間連続で食事と睡眠を抜いて支障なく行動できるので。他の冒険者とは言葉の通りに前提条件が違う。

それに、確かに冒険者は休息が必要な職業ではあるが、不真面目な者も多いのが事実だ。そもそも冒険者などあぶれ者たちが主に存在する集団である。

冒険者は所謂“何でも屋”というのが一番近い言い表し方だ。

主に民間からの依頼をこなし、その日ごとに収入を得る、日雇いの仕事だ。その分、汚れ仕事のような依頼も多く、駆け出しの間はご飯を食べるために様々な仕事をこなすのが普通らしい。

そして、ある程度の信用と戦闘能力を身に着けられれば魔物の領域の依頼をこなせるようになる。

魔物の領域は世界の大陸、海、果ては空の一部にまで広がっている、魔物たちが数えきれないほどに存在する領域のことだ。

この世界は一時、全域が魔物の領域に染まっていたが、人間が生活するために魔物の領域を開拓し始め、ある時《勇者》と呼ばれる伝説の戦士が表れ、その戦士が居た一時代に多くの魔物の領域が開かれたと伝わっている。

までもでまじめな人は、そもそも生まれた土地で職に手をつけたり、首都などの多くの人が集まるところで就職する。冒険者は国の騎士団が監視仕切れない魔物の領域のカバーなども活動内容ではあるが、やはり国によって統治されているような場所は、ほとんど全域が騎士団が魔物の領域を警護している。

全くそのような警戒態勢が無い場所は、魔物の領域の中でも大きく、深いものだ。

通称、《暗黒領域》と呼ばれる、人知の光で照らでせない領域。

ここは国の騎士団でも手を出せないような範囲と、魔物の強さを誇るといふ。今代の近衛騎士団長が魔物の領域に突入し、帰還したとき、彼は絶え絶えの息でこう言ったという

「あそこは人間には早い領域だ……」

と。

実際に《暗黒領域》扱いの魔境に入つて生きて戻つてこれる人は、世界中を探しても片手の指で足りるくらいの人数しかないらしい。

この点ではあの嫌味な魔術師も、

「僕なんかが入ったら3日で死ぬるよあんなところ。根本的に人間の住む環境じゃないし」

と、魔境に関することはあまり詳しく教えてくれなかった。いつかは打倒魔術師の為に突入してみたいとは思っている。

その魔境周辺に出現する魔物との戦闘は、初心者を抜け出した冒険者たちのご飯の種類となる。

私はそんな仕事を受けるために冒険者になった初日から、十分な戦闘能力とインプリンディングされた知識を保有していることを利用し、魔物の討伐の依頼に参加出来るように少しだけお話しさせてもらった。

それ以降、大体毎日のように魔物の間引きに参加している自分は、ギルドの中でもかなりの成果を収めている自覚がある。

ギルドとしても、毎日確実に魔物を狩り続けている自分のような存在はありがたいよ  
うで、かなり依頼を優先的に回してもらえるようになったのだ。

そんな訳で、私へのアカシアの心配は的を得ているが、外れているともいえる。

「貴女もお仕事、頑張りなさいね」

「あの、少し待っていてください！」

自分がいつものように出かけようとすると、アカシアに珍しく引き止められ、彼女は受付の方に走っていった。

この宿に泊まってから一カ月辺りまでは過労だなんだと引き留めようとしていたが、自分が本当に大丈夫なところを見せれば詮索もせずに納得してくれる、本当に良い娘だ。

少しばかり待ちぼうけを食らうが、自分が宿を出る時間帯はまだ早い時間帯であり、人気の宿屋のエントランスでも人影の数は少ない。

そういう時間帯を選んでるので当然ではあるのだが、少しばかり、建物の中に人が少ないことに寂しさを感じる自分もいる。

アカシアが帰ってきたのはそれほど時間が掛ったわけでもなく、待ち始めて2、3分くらいがすぎた頃合いだろうか。

彼女は手に見慣れぬバスケットを持ってきていた。

「これ、いつも朝早くから頑張ってるから何か渡したいなって思っ！頑張って作ったので、道中で食べてみてください!!」

「……」

少しばかり呆けてしまった。

自分が誰かから物を貰うのはあの疑親魔術師だけだったし、自分があまり愛想よく行動していない自覚があるからだ。

友達と言つても自分からは全然アカシアにも話しかけることは無いし、あちらからすればこの店の新しい常連というくらいの間柄だと思つていたけれど、こんなものが貰えるなんて感謝の気持ちで胸があふれる。

「その、ありがとう…ね。道中でいただくわ」

「はい！お気をつけて!!」

その言葉を背に受けて、私は宿屋、《白馬の料亭》の扉から外の世界へ飛び出した。

☆

まだ夜の寒さが残る朝焼けの町を歩き、水路に掛かっている橋を越え、まだ閉まって

いる商店通りを通り過ぎるとこの街、《トライの街》の冒険者ギルドが存在する。

この街は《暗黒領域》の比較的近くに存在するため、冒険者ギルドが比較的大きい。三階建ての立派な建物は両端にある属店舗を含め、周囲の最大二階建ての住宅などに比べ異彩を放っている。

この街の冒険者ギルドは、24時間ずっと受付が開いているという冒険者にとつてのメリットが存在し、この近くまで来ると少しだけ人の姿が目立つようになる。

見た目で魔法使いと分かる杖持ちの男性。

軽鎧のあごひげを整えている刀持ちのオジサン。

スピード重視なのか、普通の服のように見える装備の二丁魔銃持ち女の子。

自分のような変わり物の武器ではない、一般的に見栄えのいい装備の冒険者が多くいて少し悲しい気分になってくる。

そんなことはこれまでの生活で既に思い知っていたのでスルーし、ギルドの中に入る。

中にもやはり少数の冒険者はいるが、他はギルドの職員しか見当たらない。

いつも依頼を勧めてくれる窓口の受付嬢、黒髪に白の髪が一房交じっている同年代の女性、シロノが居る窓口に向かう。

「おはよう、今日も依頼あるかしら？」

「はい、おはようございます。今日もお願ひしたい依頼があります」

今日もとシロノは言っているが、これはシロノが自分の担当のような存在になってからは毎日用意してくれている。

ギルドとしても確実に処理したい依頼をこなしてくれるのがありがたい、自分としても毎日こなせる依頼が存在する、とWIN-WINな関係が築けているわけだ。これが自分以外の冒険者であったならば、確実にキャパオーバーして人生が追い詰められた状況になると考えられる。

依頼を確認すると、《暗黒領域》と、この《トライの街》の間に広がる草原に突如出現したボムフログの討伐になっている。

この魔物はカエルというだけあって、水辺にしか生息しないという知識が存在する。あの草原に水源があったというような事実は今までの活動で知りえてない以上、存在し



ないと思われる。

しかし、《暗黒領域》の影響で環境が安定することが無い、《暗黒領域》近くの草原でならば、恐らく急に発生することもあるのだろう。

《暗黒領域》が存在する限り、人に安寧は訪れない。

争いは生まれ、人は生きるために戦うことを強いられるだろう。

この国、《セータン》の隣国、《サンタン》が宗主国である《無魔教》の教えの一つだ。魔物が生まれるのは領域に存在するような《魔気》が原因であり。それが魔物を生み出す以上、人は争いの手段をもって、被害を抑えるしかない。

それでも私たちは、一日一日を生きていくことになるのだろう。

私は依頼の署名をしながら、頭の片隅でそう考えた。

## II 物語の始まり

——この辺りですかね

草原の中を歩きながら周囲を見渡す。

既に発動している探知魔術では既に反応が消失している。魔物も生物であり、生きる上での知能を有しているのだから、発動者の魔力によって敵の位置を識別する探知の魔術を発動させれば自分の《魔気》を体内に押しとどめることによって、自然の中に身を隠すくらいのこととする。

特に魔物は《魔気》から出現し、産まれた時から知能を有しているのが質が悪い点だ。普通の動物よりも、幼少期がないため生存確率が上である。

それでも探知時にこの辺りに数十匹の反応があつたのだから、近くに身を潜めているのだろう。

何十匹ものカエルの群れが一気に大きく移動を開始すれば、その痕跡が残っているはずだ。

周囲を見渡すが、一面に生えているそこそこ丈のある草が倒れているような様子は見

当たらず、周囲は静寂を保っている。

聞こえているのは自分の息の音と、そして風の流れの囁きだ。

風は生えている草によって遮られ、カエルのような大きさの石なども多く存在しているので、風の流れを読んで敵の位置を把握するのは、少なくとも向こうが動きを見せない限りは不可能である。

そもそも人の手で整理されてない草原など、凸凹な地形が多すぎて背丈の無い敵の判断など難易度が高い。

人工生命体であり感覚が鋭い自分でも、不可能なことは不可能なのである。

だけど今回の依頼は討伐依頼であり、カエルを討伐するまで帰還出来ないのも、周囲に影響が少ない魔法であぶりだすことにする。

魔術を使うために自分の中の魔力を活性化させる。

自分の中に流れている魔力の流れを把握し、その流れの速度を速める。

そうして活性化した魔力を外に放出するために、手から握っているメイスに流す。

そもそも魔術とは魔力を流すだけで発動するモノではない。

詳しいプロセスを学ばなければ理解できないが、魔力をいくつかの過程に通し、最終的に発動する魔術に繋げるのである。

人間の髪の色は、自分が扱える属性術式の特徴を表すものであり、自分は全属性の魔術を扱えるように生み出された万能の魔術士である。

そのような理由があつて自分の髪の色は虹色である……、訳でなく、虹色なのは生みの親のあのクソ魔術師の気分である。

そもそも人工生命体に魔術属性を持たせるとして、髪の色程度なら高レベルの魔術師になれば偽装可能であり、魔術師として中位以上の実力を持つ者ならば、自分の髪の色は隠蔽位くらいできる。

自分が髪の色をこんなに目立つ色にしたままなのは、そのような契約<sup>ルール</sup>が存在するからである。

あのクサレ魔術師は絶対に今度会ったら殴ると心に決める。

魔力を杖から放出する。

今回発動させる魔術は電撃系。

メイスを地面に接地し、自分を中心に電気が薄く広がるように魔術を調整。強さを最低限にし、代わりに遠くまで届くように術式を改変。

「インパルス  
電撃・改」

周囲に薄く光が広がると同時に、自分から20mほどの距離にある茂みの中から多くのカエルが飛び出してきた。

ボムフロッグは普通のカエル同様に水の中に生息する特徴を持った魔物であり、大体の水生生物の弱点である電撃が良く効くことに変わりはない。

そして、ボムフロッグは特に電撃に弱く、その理由が彼らの名前にも入っている“爆弾”の要素である。

魔物は人間の扱う魔術と同じように《魔素》を扱って属性の攻撃をするなどの特徴がある。

彼らは水中での攻撃手段に、《魔素》を変換して爆発させるという手段を選んだ。

ボムフロッグは、カエルという概念がカタチになったと言われており、爆発するのに炎に強く、雷に弱いというなんとも言い切れない耐性を持っている。

それが分かっているにもかかわらず、前衛が近付けば当然のように危険だし、ある程度の距離を保ったまま魔法でケリをつけることが推奨されている。

しかしそれも難しい。  
理由は簡単、

「ゲコオ!!」

「ゲロオ!!」

「ゲコゲツ!!」

「ロオ!!」

「ゲロゲロオ!!」

このように群れで活動しているので、一気に多数が襲い掛かってくるからだ。

しかも、下手に近距離で仕留め切ると爆弾化し、こちらに損害を押し付けてくる害悪魔物である。

これは自分に押し付けられたとも考えられる。

それは、自分なら対処可能と考えられたということでもある。

「雷槍<sup>ケラ</sup>投射<sup>ヲ</sup>多重<sup>ウツ</sup>展開<sup>ス</sup>、掃射<sup>ファイア</sup>!!」

空中に雷で出来た槍を多重展開し、それをカエルの集団に向けて放つ。

カエルは地面で跳んでこちらに向かってくるので、空中での方向転換などは足場が無いと不可能である。

始めの電撃は相手の位置の把握するためだけに発動させた魔術であり、初めからこちらの雷槍に多くの魔力と術式演算を割いている。

自分ほどの魔術士になれば、創り出す雷槍の太さは5 mにも満たず、カエルのどこか一部を貫いて、地面に縫い付け、そして電流を流し切り即死させる。

雷に貫かれたカエルを見続けることは無く、空中で更にジャンプしたカエルの個体集団にメイスの先端を向ける。

おそらくは、自分の下にいたカエルを踏み台にして更に跳躍したのだろう。流石、野生の勘と言えいいのか。魔物の生存能力は人の想像以上に高い。

「フォース イグニッション魔力撃、連射!!」

魔力を術式を通さずに形状固定、投射する。

魔術の術式を通さずに魔力を操作する技術は、魔術を使う者の基本にして奥義。

どれだけ正確に、早く、意のままに操れるかが問われる。

私ならば、1秒の間に1000個の魔力塊を作りだせる。

これでも、製作者の魔術師からするとまだまだである。

あいつは、1秒の1/10で1000個の魔力塊を作りだせる。

それも、自分より細かく魔力の形を変形しながらだ。

まあ、それでも比較対象が悪いだけで、自分もそれなり以上の魔力操作の腕はしている。

目の前のカエルを全滅させる程度は訳が無い。

全てが地面に横たわっている光景を眺めて、これらを全て回収する苦勞を考えると、私の口からはため息しか出てこなかった。

☆

カエルの群れが残り4つほどあったのでそれらも全て全滅させ、街に向かって歩いて



戻る。

戦闘はほとんど時間をかけずに終わらせたので、やはり亡骸の回収にばかり時間を費やした。

カエルはぬるぬるしてるし、あまり触りたくなかったが、そんなことに魔力を使うのも馬鹿らしく、自分の手で全て回収を終えた。

水も周囲に無いのになぜぬめぬめ感が存在していたのかは分からないが、とりあえず、今後はこの付近に一切誕生しないしてほしいと思う。

街が見えるところまで歩いて戻ってくる。

ここまで来ると、無意識に張っていた気が少し緩んでくる。

やはり、何が起こるか分からない外よりも誰か人の目があり、良識の存在が多く存在する方が安心感がある。

街の門番と軽く話をし、自分の街の出入りを済ませます。

冒険者であり、今朝街を出る手続きをしたばかりだが、そのあたりを疎かにし、街の中に悪魔がもぐりこんだという実例も存在するため、魔力の検査や軽い会話などは必須の項目となっている。

それを終わらせ、朝とはうって変わり、人の溢れるにぎやかで騒々しい街の中を一人

歩く。

自分が帰ってきた時間は太陽の一番高い時間から数刻が経った程度の時間であり、人が一番活発に活動する時間でもある。

冒険者が動き回っている姿を見ることが出来れば、商人が今日の商売を終え早めに帰宅する姿も見受けられる。

これから、冒険者が帰ってくる人をメインの対象にする店が多い中、先ほど帰っていた商人は珍しいように思える。

商売なんて水ものだと言われれば、それもそうだとしか言えないが。

ギルドにまで歩いて戻ってきた。

このくらいの時間になるとギルド内部はほとんど人の影が無く、職員が受付の向こうで書類仕事をしてるくらいになる。

シロノは外からは見えなかったので、他の職員に声をかけることにした。

「すみません、依頼の報告お願いします」

「はい、では荷物袋<sup>ボックス</sup>の提出をお願いします」

討伐系の依頼を受けた冒険者は、ギルドから空間魔術デイメンジョンのかかった袋を渡される。

その袋で依頼登録をしたあと、実際に討伐した魔物の証や、魔物自体を収納するのだ。

今回は、魔物自体がそこまで大きくなかったため、全て回収の依頼だった。

空間魔術デイメンジョンが付与されているものは内側が別空間となっており、内側に入れた物の重量を感じなくて済む。

これを個人で買うと凄い金額になるが、ギルドはお抱えの魔術師に付与させているらしい。

自分でも付与は出来るはと言えば出来るのだが、安定した空間を作るのは、感覚的に5m・くらいまでしか安定させられないのだ。

これはやはり慣れと技術の問題なのだろうが、今はとりあえずギルドの階位をあげて、《暗黒領域》に入るための許可が欲しい。

そのためにはコツコツと成果を重ねて、自分の有用性と実力を知らしめなければいけないのだ。

「では今回は魔物は《魔核》を含めてすべて納品でよろしいですね？」

「ええ、お願い」

《魔核》は魔物が発生する際に必ず持っている石状の《魔気》の塊であり、日々の生活の燃料として使われる。

魔物が使うような術式の解析も進んでおり、その一部が一般の生活の中に普及しているのだ。

当然その買取は、日々の生活に使われるということでもかなりのいい値段になる。

自分の場合使い道が無いわけではないが、あの大きさの魔物からとれる《魔核》はたかが知れてる。

自分が領きを返すと、職員の人が受付の奥にある魔物を置くスペースにカエルを出していく。

大体30〜40匹は倒し、なおかつ状態もいと自負していたので、今日もそこそこの収入を得ることが出来た。

——今日の仕事は、これで終わりだ。

☆

宿に戻ると、人の影がエントランスにそこそこあった。

この時間に人が多いのは珍しいなと思っていると、耳に会話が入ってくる。

……明日からの食事をアカシアに任せてみるという会話がオーナーたちから聞き取れた。

明日の朝食はここで食べていこうかと考えると、少し心が弾んだ気がした。

部屋に付いたら、鍵を使って中に入る。

「ふう……」

やはり、人の視線があると安堵すると同時に緊張してしまう。

外に出ていると、無意識のうちに何かの要因で緊張してしまうのは、内弁慶な私の悪いところだと思う。

メイスをベッドの淵に立て掛け、胴鎧は脱いでしまう。

服を下着以外全て脱ぎ、ベッドに倒れる。

外を歩くのは楽しいが、同時に体力を使うということ、外に出てから初めて知った。それでも、私は外に出てから、たくさんのことを知ることが出来た。

私は、こんな日常を送れて幸せだと思う。

——この時の私は、  
変わらないものなどないのだということを、  
知っている振りを  
してすごしていたのだ。

## Ⅲ 物語の始まり

(…聞こえてますか…聞こえてますか…)

(今、あなたの心に直接語り掛けています…)

(おそらく) 夜中、急に聞こえる声で意識が浮上する。

目を開けようとしても何も見えない当たり、クソ魔術師が夢の中で話しかけて来たの  
だろう。

これまでも似たようなことは多々あったので、既に慣れてしまった感覚が腹立たし  
い。

「それで、何の用なのよ」

「おや、せつかく産みの親が声をかけてあげているのに悲しいね」

実際に鳴きまねの声を送ってくるこの腹立たしき、説明しきれないが、どうにかして  
ほしい。

「君の方も元気にやっているようだね。創りだした者としても安心できるよ」

「そんなこと、あんたにだけは言われたくないわ。創り出した魔法生命体全部放り出してるあんたにはね」

そう、こいつは頻繁に魔法、錬金術などで人工生命体を創り出す癖に、それらを全ての世界に放出するような魔術師なのだ。

私が2年ほどあいつの塔で過ごしていた間に知るだけでも、魔獣型数十体と、変な錬金生命体数体、見た目がほぼ人間の人工生命体数体が創られ、塔の外に放流されたのは知っている。

今ぱつと思いつくだけでも人の手足、肢体だけが生えたサカナマン（魚人<sup>マイマン</sup>や人魚<sup>マーメイド</sup>ではない）やドワーフの身体にエルフの耳、ワーウルフの足を持ったヒト（？）（本人は自分に誇りを持っていたらしい）や、ハチの巣を体に装備した超巨大女王蜂（温厚）などなど、思い出しきれないほどの魔法生物が生み出されていた。

基本的に創る時はとても楽しいが、創り切ってしまうと一気に熱が冷めてしまうタイプなのだという。

生み出された私が言える立場ではないのだが、もう少し責任というものを取って欲しい。

いや、私が記憶の定着と実際の体験を積むまで置いてくれたので、最低限の親と



しての責任は果たしているのかもしれないが、それでも言いたくなるのもしようがないことだと思う。

「僕も一応は創り出した子全てに気を配ってるんだぜ？そうでもなければ君にこうして話しかけることもなかっただろうね」

「それは……」

確かにそうだ。

というか、こいつから話しかけてくるなんて珍しい。

直に顔を合わせて生活していたときでも、あちらから私に話しかけて来たことなんて二桁回に届くかどうか位なのに。

「で、どうして私に話しかけてきたのよ」

「いやあ、伏線を貼っておこうかなあと、少しばかり思ってたね」

「伏線？」

「こいつはいきなり何を言い出しているのだろうか。」

突拍子が無いのはいつものことだが、何で服に線を張り付けるのだろうか。

「いや、君の方はこのことを頭の隅にでも置いておけばいいさ」

「きつと、すぐに思い出すことになるからね」

「じゃあ、言いたいことは言ったから切るね。また」

そう言つて、やつは一方的に話を終わらせ、私の意識は急激に闇の中に落ちていった。

☆

「……ん」

意識が浮上する。

何か、気に障るような夢を見ていたような気がするが、それを思い出すことは出来ない。  
い。

部屋の中はいつもと変化の無いように見える。

……ただの気のせいなのだろうか。

それとも、夢見が悪かったせいでもより神経質になつてゐるのだろうか。ベッドから体を起こし、いつもと同じように服を着替える前にタオルを取り出す。

「ヌルウアツサ小さい水よ」

水を外に取りに行く時間を短縮するために水を魔術で産みだしタオルを濡らす。

この時、魔力の操作によつて水の温度は調整できるので、人肌ほどの温いぬるま湯を、タオルが吸収できる程度の量発生させる。

この魔術を起動するときにかかる魔力は発生させる水の量の分だけであり、その他の水の発生位置や温度の調整などは、魔力操作によつて調整出来るので、今後の探索などに影響が出ることは無い。

インナーのみだった服を脱ぎ、濡らしたタオルで体を拭く。

ここには個室備え付けのシャワーもあるが、自分がそれを利用するのは一週間で1〜2日程度だ。

そもそも魔術によつて汚れを消せる以上、濡らしたタオルで身体を拭くのも自己満足だ。それでもこの気持ちよさを逃すのは勿体ない。

首筋から腕やお腹を拭き、胸を抑える下着を外す。

昨日は疲れていてそのままにしてしまっていたが、胸を押さえている下着は寝るときは外しておいた方がいいという知識がある。それでも面倒なものは面倒なのでそのままにしてしまったのだが。

そこそこの大ききの胸を下から拭う。

胸を動きの邪魔にならないように冒険中抑えている関係上、谷間や下乳の部分に笑い話では済まない量の汗がにじむ。

こういう部分まで人を再現しなくてもいいと思うのだが、あの変態魔術師は偏屈なこだわりを捨てずに再現している。

胸の下から周囲を回すように、丁寧に拭き取る。

この時の爽快感が忘れられないのだ。

上を拭き終わり、パンツを除き脱いでおいた下半身を拭き始める。

パンツはそこそこの伸縮性のある素材のもの(クソ魔術師作)を利用しているので、脱がずに拭き続けることが出来る。

身体中を丁寧に拭き終わり、いつも通りの冒険装備を着る。

鏡の前に立ち、いつもと変わらない姿かを確認する。

いや、今日は少し髪が乱れているようだ。

昨日、手入れもせずそのまま乱雑に寝たからだろう。

部屋に備え付けてある机の引き出しから櫛を取り出し、鏡の前に机とセットの椅子を持つて鏡の前に戻る。

鏡の前で背を向けるように座り、乱れている部分の髪に櫛を通す。そこそこ強めに癖がついているようだが、それでも自分の髪は本来まっすぐなもので、櫛を通すたびに少しずつ癖が消えていく。

髪の癖を直し、もう一度鏡の前に立ち、自分の姿を確認する。

——その時、

——ドオオオン!!

早朝に発生するには似合わない、無粋な爆発音が響いた。

それが聞こえた瞬間、私は部屋の窓を開き、外に飛び出していた。

☆

自分の聴覚の良さから、爆発音がした方角は性正確に捉えている。

その上、外に出ると推定爆発が起きた場所からは細い黒煙が上がっている。

そこに向かって、住宅の屋根を駆けていく。

魔術を駆使し、自分の体重を軽減させ、踏み込むときに生まれる推進力を加え、風の抵抗を散らす。

爆発音が聞こえたと言っても、まだ聞こえたばかりであり数少ない明朝から活動している人が少しばかり混乱している状況のようだ。

その誰もかれもが爆発音のしたと思われる方向に目を向けていることで、自分に対する注目は全くないと言ってもいい。

屋根の上を駆けている自分に向いている意識はない。

爆発音がしてから51秒が過ぎたころ、煙の発生している視点が覚えて来た。

川に架かっている橋の下から煙が発生している。

橋の上や橋の下に繋がる階段辺りから覗いている人はいるが、現場に踏み込んでいる人は居ないようだ。

慣性を操作し、地面に着地する衝撃を和らげる術式を展開してから川脇の地面に着地

する。

こうすれば高速で降りても土煙もあがらないので周囲に迷惑がかかるともないうちに、自分の着地の反動もなくなる。

橋の下の爆心地と思われるところに駆け寄ると、漸く爆発が起きた瞬間から舞い上がっていた多量の煙が収まり始めたところと見受けられた。

爆心地は地面が軽く抉り取られており、中心に燃えるナニカが存在する。

しかし、私はそれが何かを確認することが出来なかつた。

——揺れる煙のせいで見え隠れするが、

《left》——煙の向こうに見える人影は、  
《left》

——まぎれもなく、

《left》——普段の姿とは変わりはてた、  
《left》

——アカシアの、燃えた後の、姿だった。

☆

「あ、あア……」

声が出なかった。

知識として、人が死ぬということは知っていた。

だが、こんなにも唐突に、あまりに無慈悲に、散らされるものだとは思ひもしなかった。

アカシアは普段と同じ服を着ていたことは、足元のスカートの切れ端、いや、燃え残りから見て取れる。

が、身に着けていたほとんどを黒い焦げあとへと変えていた。

少し爆発の影響を免れた顔が悲惨であり、手で隠したのが間に合った半面は肌が残っているが、残りの半面が焼け爛れ、既に私が見慣れたアカシアの面影を奪っている。

かろうじて、少し体が痙攣か、呼吸化は判別出来ないが、動いていることは見ることが出来た。

だが、そんなことはどうでもよかった。



よく、物語の中では死ぬ間際の人に声をかけるといふシーンがあるが、私にはそんなことは出来なかった。

……認められなかった。

——アカシアが何か悪いことをしましたか

——アカシアが何でこんな目に遭っているのですか

——アカシアの将来を奪うのは何故ですか

頭に浮かんでは、纏まらない頭の中を通り過ぎて消えていく疑問は数多ある。

働かない頭をなんとか動かそうとしても、受け入れたくない現実を理解することを拒否していた。

だが、冷静な頭の一部では理解していた。

目の前の光景が、唯一不変の現実なのだ。

「……」

私は、不思議と忘れていた今朝の夢を思い出した。

いや、そうなるようにロックがかかっていたのかもしれないし、そうでなくても大きすぎる衝撃が呼び覚ましただけかもしれない。

「……………よ」

「助けなさいよ！クソ魔術師!!」

「はいはい、声が大きいね君は」

自分の生クッみツの親魔術師は、最後に視た姿と一切変化がない怪しげなローブ姿で。私の目の前に現れた。

「あんたならどうにかなるんでしょ！だから助けてよ、助けなさいよ!!」

「君は少し落ち着きなさいよ、流石に気が動転し過ぎだ」

目の前になんの様子も変わらないクソ野郎をみて、怒りがこみあげて来た。

「あんた一体どう——」

声が出なくなつた。

口に出せば簡単な原理が魔術によって引き起こされ、私の声は封じられた。空間の振動が止められた。

私の口周辺だけ、綺麗な空間制御で、高等な魔術式が展開されていた。

無論、犯人は目の前の外道魔術師だ。

「だから落ち着きたまえ。なんで僕が出て来たのか、夢の件も含めて冷静になつて考えてみなさい」

思考が一気に加速した。

こいつが夢に出てきたこと、自分がここで読んだ瞬間現れたこと、私とまともに口をきいていること。

「——たすけて、くれるの？」

「ああ、そのため登場人物としてにこの場所にいるんだからね」

そう言つて魔術師は手に持った木製の大きな杖をアカシアに翳し、転移の術式でどこ

かに、恐らくは私が産まれた塔に転移させられていった。

「じゃあ、彼女はこつちでなんとかするから。君は君のやりたいようにやればいい」

「——おねがい…、彼女のことをお願い…!!」

「ああ、任されたさ」

そういつて魔術師は、自身もその姿を消した。

——これが、全ての始まり。

——ストーリー物語の起こりは、確実にこの事件だった。